



おばけがでたぞ



マドレーヌとパリのふるいやしき

ジョン・バーメルマンズ・マルシアーノ 作 江國 香織 訳 BL出版 Eーマ

マドレーヌたちがくらしているふるいやしきに、こうちょうせんせいのククフェイスきょうがぬきうちけんさのためにやってきました。どこもかしこもしっかりしらべ、ククフェイスきょうはあけたことのないドアのまえにたちどまりました。むこうになにがあるのかとたずねると、ミス・クラベルは、やねうらべやへつづくドアで、おばけがでますといいます。

お化けの猛暑日

川端 誠 作 BL出版 Eーカ

朝はやくから気温があがりはじめ、三十五度をこえる猛暑日になりました。お化け屋敷には扇風機もクーラーもなく、お化けたちはバテバテです。ひよろけは一反木綿に、空にあがって龍にすずしい雨をふらせてくれるようたのんでみます。一反木綿は天狗といっしょに、空へまいあがっていきました。

おばけのジョージ

ロバート・ブライト さく・え 光吉 夏弥 やく 福音館書店 Eーブ

ホイットィカーさんのいえのやねうらに、ちいさなおばけのジョージがすんでいました。ジョージがまいばんおなじじかんにかいだんをみしりといわせ、ドアをぎーといわせるので、ホイットィカーさんとおくさんはねるじかんだとわかります。あるひホイットィカーさんが、かいだんのゆるんだいたにくぎをうち、ドアのちょうつがいにあぶらをさしたので、かいだんやドアのおとがなくなり、じかんがわからなくなりました。

猫魔ヶ岳の妖怪 福島

八百板 洋子 再話 斎藤 隆夫 絵 福音館書店 Eーサ

とおいむかし、磐梯山の西に妖怪がすむ山があり、村びとたちはおそれて山に近づかないようにしていました。ある年の秋、殿さまが妖怪たいじを家来にめいじますが、その晩、風といっしょになにもものかが奥がたをさらっていきます。殿さまは奥がたをすくいに家来を山にむかわせましたが、だれひとりもどってきませんでした。そこで殿さまは、うでのいいりょうしをよびよせます。

小さいおばけ

オトフリート・プロイスラー 作 はたさわ ゆうこ 訳 徳間書店 943－プ

ずっとずっとむかしから、ドイツのフクロウ城^{じょう ちい}に小さいおばけがすんでいました。昼^{ひる}のあいだ、小さいおばけはお城^{しろ}のやねうらべやの木^きばこの中でねむっていて、夜中^{よなか}の十二時^{じゅうにじ}になると目^めをさします。天気^{てんき}がわるいときは、お城^{しろ}の中^{なか}のいろんなへやをまわり、そうでなければ外^{そと}へとびだしていきます。とくに月^{つき}の光^{ひかり}をあびてとびまわるのは、うれしくてたまりません。

妖怪一家九十九さん

富安 陽子 作 理論社 913－ト

ある日^ひ、大勢^{おおぜい}の妖怪^{ようかい}が住^すんでいた野^の原^{ばら}に、人間^{にんげん}たちが巨大^{きょだい}な団地^{だんち}をつくはじめ、妖怪^{ようかい}たちは腹^{はら}を立てます。そこで代^{だい}表^{ひょう}して、ヌラリヒョンが市役所^{しやくしょ}に出^でかけていきました。地域^{ちいき}共生^{きょうせい}課^かの野中^{のなか}さんは、人間^{にんげん}と一緒^{いっしょ}に団地^{だんち}で暮^くらしたらどうかと提^{てい}案^{あん}し、妖怪^{ようかい}たちは全^{ぜん}員^{いん}、団地^{だんち}で暮^くらすことになりました。一^{いっ}びきだけで暮^くらしてきた七^{なな}ひきの妖怪^{ようかい}は、九十九^{つくもいつか}一家^{いっか}として化^{あだ}野原^{しのはら}団地^{だんち}の地下^ち十二階^{かじゅうにかい}での生^{せい}活^{かつ}をスタートさせます。

オバケの長七郎

ななもり さちこ 作 福音館書店 913－ナ

『やなぎした商店街^{しょうてんがい}』に、古道具屋^{ふるどうぐや}の『へなもんや』があります。この店^{みせ}のおやじ、源^{げん}ジイはお風^{ふう}呂屋^{ろや}のかえり道^{みち}にオバケをひろいます。源^{げん}ジイは長七郎^{ちやうしちろう}と名^なのったオバケを鳥^{とり}かごとじこめて、店^{みせ}ののき下^{した}につるしました。長七郎^{ちやうしちろう}がやってきてから、店^{みせ}に子^こどもたちが毎^{まい}日^{にち}やってくるようになります。